

273回 サロン9条例会報告 2016・4・5 参加者 11名

テーマ「カンボジアから学ぶこと」

話題提供 平井花画さん（岐阜県ユネスコ協会）

富岡製糸場世界遺産登録で話題になったユネスコですが、多くの方がユニセフと混同しているということで、平井さんのお話はユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の成り立ちから始まりました。ユネスコは「教育科学で平和をめざす」という理念で設立され、日本は1951年に、敗戦後「もう二度と戦争はいやだ」という日本国民の機運がアメリカを動かし、最初はアジア諸国の反対があったにもかかわらず、パナマの仲介で最終的に満場一致で加盟が認められました。日本の国際連合加盟はその5年後です。

世界の人口73億人のうち学校に通えない子どもが約67万人、大人7億人もいます。「全ての人に教育を。釣った魚をあげるより、魚の釣り方を教えよう」という理念のもと、1990年には国際識字年が設定されました。

ポルポト政権により根絶やしにされた教育。その結果生まれた実態を青年（特に教員志望者）に見てほしいとカンボジアの旅は企画されています。

カンボジアには地雷原があちこちにあります。いまだに事故が絶えません。そんなカンボジアから平井さんは2月に帰国されたばかりです。今回は若者10名を連れて行きました。シアムリアップ、バタンバンなどを訪れました。ユネスコは世界寺子屋運動を展開しています。日本も寺子屋が近代化の基礎を作りました。そんな意図で作られた屋根だけの学校で子どもたちに「朝ご飯を食べてきた？」と聞くと、だれも手をあげない。ビスケットを2枚ずつ配ると、ある子はお母さんにあげると言って鞆にしまったそうです。ユネスコは駕籠編み、ニワトリの飼育、舞踊、識字などで自立、教育のサポートをしているそうです。

平井さんの話の後、参加者からの質問や感想で更にカンボジアについて理解を深めることができました。現在、カンボジアは中国、ベトナム経済をバックに、格差社会が増大しています。アンコールワットなど、観光資源があっても、韓国などの外国資本に握られていて、カンボジア自身の発達にはつながっていないそうです。「今まであまりにもカンボジアについて知らなかった」という参加者からの感想に、平井さんから、「カンボジアへの旅に参加されませんか？1週間で20万円ほどですよ」とお誘いがありました。

教員になったカンボジアの旅の参加者から「毎日大変な子どもたちを相手にしているが、カンボジアの話をしたときは子どもたちの反応がまるで違っていた」という、うれしい報告もあったそうです。今、中学生を連れていく企画を計画中だそうです。

アンコールワットでの早稲田大学と上智大学の学生の修復活動、地雷原での小松製作所の機械による地雷除去など、日本の技術が活躍しているという報告もありました。こういう形での日本の貢献こそが大切だよと皆で頷きあいました。